



街中の歴史的な実用美



東京未来大学 学長

大坊郁夫 (だいぼう いくお)

北海道大学大学院博士課程退学。札幌医科大学、山形大学、北星学園大学、大阪大学を経て現職。専門は対人社会心理学。著書は、『対人社会心理学の研究研究レシピ』（監修、北大路書房）、『幸福を目指す対人社会心理学』（監修、ナカニシヤ出版）など。

目的地がはっきりしていて、時間に余裕がない場合には、誰でもそうでしょうが、真っ直ぐ向かうものです。でも、時間に余裕のある場合には、外の世界にあれこれと注意を向けるものだと思います。特に、なじみのない場では探索する意図も含め、周りに注意が向くものです。

近年は海外の学会大会に出かけやすくなりました。彼の地では当たり前な景色、事物などであっても日本では見慣れないもの・ことにはつい注意を惹かれます。殊に、歴史や文化の謂われを感じるものには興味津々です。

随分昔になりますが、英国Yorkに滞在した折には、そこかしこの玄関先に妙なものがあのに気づきました（Londonでも他所でも同様）。あちこちで目にする割には普段使っている様子でもありませんでした。

それは、「靴の泥落とし（boot scraper）」でした。形は様々で、靴底の泥をそぎ落とすだけの機能なのですが、それぞれ意匠を凝らしたものが多く、芸術品ともいえる凝ったデザインのものもありました（フォトギャラリーとしてお見せできるといいのですが）。その昔は道路事情もよくなかったでしょうが、現在では少なくとも街中では泥だらけになることは少ないので、実用性はないはず。英国流の昔のものを大事にする、邪魔にならなければそのままにしておくという文化を感じます。実用性だけに留めず、実用美

に高める心のゆとりに感心したものです。ちなみに、英国でよく見かけるハリネズミの形をした泥落とし（背中の中ハリの部分がブラシになっている）は容易に手に入るので購入しましたが、帰国の際重いので（胴体が鉄製）、泣く泣く（！）持参を断念しました。



昨年、フィレンツェ、ミラノを訪れた際には、屋敷の重厚な扉、ドアノッカー、扉近くの石壁に付いている馬車手綱止めに興味を持ちました。大きな屋敷のみならず、家々の扉、ドアノッカーの意匠は多様です。手元の写真を眺めても、重々しい円輪、ライオン、魚、少年、ガーゴイル（？）等々。扉自体の装飾も様々で、デザインするのが当たり前の文化を感じます。今や玄関には呼び鈴があるので、このドア・ノッカーは伝統美を楽しむために残されているものなのでしょう。それぞれの家の格式、歴史を自らが認識し、かつ、世間に示す重要なサインに思えます。

ちなみにフィレンツェで泊まったホテルは昔の貴族の屋敷を改装したものでした。部屋は現代風の造りではありましたが、敢えて古いやや朽ちた、ノブも壊れかかったドアをクローゼットのドアとして活用していました。泊まり客に

歴史を味わってもらおうとの趣旨を誰もが感じるものでしょう。

馬車止めは、玄関先に馬車などの手綱を掛けておくもののように、随分がっしりしたものばかりでした。メディチ家縁の邸宅では、これがいくつも設えてあり（下の写真）、往時の権勢絶大であったことが偲ばれます（石壁も立派！）。



どこの国であろうとユニークな歴史と文化があるので、他国の人間はそれぞれに趣を感じるものがありましよう。私などは、キリスト教芸術の他には、石造りの建築物や石畳、金属細工の技術に目が向いてしまいます。独り善がりの視点で、かつ外から見える範囲の瞥見でしかないのですが、それこそ勝手な印象由来の文化想像の楽しみは捨てがたいものです。

そう言えば、イタリアでの玄関扉はどこも分厚く、大きなものでしたが、これは、馬車がそのまま中庭に入れるようにするため、ドアノッカーが重々しいものなのは、広い屋敷の中まで来訪を告げる音が響くようにとの実用性を考慮したものようです。